

「2017年インドネシア大学スプリングスクール 参加報告書」

京都大学文学部3年 濱 希望

世界最大のイスラーム国であるインドネシアに行くということで、宗教上のタブーや決まりがたくさんある厳しい国なのでは、と緊張していましたが、実際に訪れてみて、イスラームの教えを守っている人々はいくれども他の宗教や非ムスリムにも寛容な国だと感じました。しかし、レストランや食堂には豚肉や酒がないところが多く、また知り合ったほとんどの人がムスリムで毎日祈りの時間に礼拝場所へ行って礼拝をしており、毎日の生活の中に色濃く表れているイスラームの習慣について多く目にすることがありました。それらは、法事などの折にしか宗教というものを意識することのない私にとってとても新鮮なものでした。私たちが宗教のことについて率直に尋ねても、インドネシア大学の友人たちは嫌な顔せず丁寧に教えてくれました。このように宗教について触れ、考えたことによってより視野を広げることができたと思います。デポックやジャカルタの町は車や人が多く、圧倒されそうなほどの活気を感じましたが、一方で小さな子供が道端で物を売っていたり、電車の窓からスラムの町が見えたりといった面もありました。

プログラムの大きな目的はインドネシア語の学習とインドネシア人学生とペアになったのプレゼンテーション発表でした。インドネシア語の学習については毎日3時間の授業を受け、休み時間の買い物などでインドネシア語を積極的に活用するようにしました。プログラムの中盤、日本語初級の授業に参加する機会があり、そこではインドネシア語から日本語へと、私たちとは逆のことが行われていて興味深く参加しました。日本についての授業に参加した際、第二次世界大戦時や現代の日本について学生たちが意見を述べており、現代における日本の政治的立ち位置について明言する学生たちの率直さにドキリとしました。プレゼンテーションについてはとても大変でした。ペアの学生は日本学科の学生で、お互いに意思疎通を日本語で行っていたため、日常会話については問題なく会話できていましたが、プレゼンテーションなど難しい内容になるとはっきりとお互いの意思を伝えることがとても難しく感じました。さらに、彼らが日本について言葉だけでなく社会や文化に関する事柄もよく知っていたのに対し、私はインドネシアについてほとんど知らなかったので申し訳ない気持ちになりました。しかし、毎日顔を合わせて根気よく話し合い、お互いの国のことについて、言葉の苦勞がありながらも話し合った時間はとても有意義なものになりました。大変だったぶん発表が終わった時には二人で大きな達成感を得ることができました。

このプログラムでは多くのインドネシア大学の学生たちにお世話になりました。彼らは自分たちも授業などで忙しいなか、毎晩おすすめのインドネシア料理を教えてくれたり、放課後や土日には買い物や観光に連れていってくれたりしました。彼らの優しさを忘れず SEND プログラムの受け入れ側に携わるなどして何とか恩を返していきたいと思いました。また、このプログラムでさまざまな京大生と出会えたことで学校生活や将来のことなどたくさんのお話をすることができました。このプログラムは多くの新しい考えや人々に出会わせてくれた、自分にとってとても有意義なものであったと思います。